

「コメディリリック第3回」「WORKしよひよ」

「アフターファイブ」

登場人物

齋木

野彦

白井

シロスコフ

※白井、齋木、板付き。

【L・明転】

白井、齋木、商談がまとまった感じ

白井 「どうでしょうか？」

涎で指をびちよびちよにしながら資料をめくる  
齋木

齋木 「そうですね。後は上の方に形式的な確認だけとって、契約成立ということだ」

白井 「よかった！これから何卒宜しくお願ひします！」

齋木 「お願ひします」

白井、齋木に握手を求める

齋木 「はは」

齋木、照れながらも握手を交わす

白井 「お願ひします」

齋木 「こちらこそ、是非、今度お食事でも」

白井 「そうですね！是非！」

齋木 「今日はこの後もお仕事ですか？」

白井 「このまま直帰ですね！やった！」

齋木 「それだったら今から飲みに行きませんか？」

白井 「え、齋木さん大丈夫ですか？」

齋木 「僕は独り身ですから」

白井 「あ、そうですね。僕は同棲してるんですよ」

齋木 「そうですね！羨ましい」

白井 「あ、そういえば今日は彼女が夕飯作るとか言ってたな……」

齋木 「あ、じゃあ、連絡されますか？」

白井 「え？」

齋木 「連絡。ほら彼女が作っちゃうと勿体ないから」

白井 「えっと……そうですね。連絡します」

齋木 「お好きな食べ物とかは？」

白井 「いやいや、何でも食べますよ」

齋木 「お酒の方は？お店はどういう感じにしますか？」

白井 「そうですね…移動するのも面倒ですから、このままこのお店でちよいちよいつと飲んじやいますか？」

齋木 「いいですね！」

白井 「はい！」

齋木 「彼女羨ましいなあー。僕にも誰か紹介してくださいよー」

白井 「探しときますね」

齋木 「え？います？どんな感じの人ですか？」

白井 「いや、彼女の友達とか、ちよつと聞いてみて」

齋木 「え、彼女はどんな方ですか？周りの友達どんな感じですか？」

白井 「えつと、今度機会があったらご紹介します」

齋木 「是非！絶対ですよ？約束ですよ？」

白井 「…はい…そうだ、せっかくなんで会社の同僚呼んでもいいですか？そろそろ終わる時間だと思っうんですよー」

齋木 「女性ですか？」

白井 「いや、男性です」

齋木 「男かー」

白井、電話をかける

かけてる間、齋木、手持無沙汰な感じ

白井 「あー繋がらないですねー。まだ仕事終わってないのかな」

白井、電話を切る

齋木 「残念ですねー。残業ですか？」

白井 「うち、そんなにあるわけじゃないんですけどねー」

齋木 「そうなんですか。うちは結構、この時期残業多いんですよ」

白井 「はい…」

白井、聞いてない感じ

齋木 「白井さん、ご趣味は？」

白井 「うーん色々ですね。…ちよつと僕の後輩は絶対、仕事終わってるはずなんで呼んでみてもいいですか？」

齋木 「女性ですか？」

白井 「いや、男性です」

齋木 「男かー」

白井、電話をかける

斎木、手持無沙汰な感じ。手相をなぞる

白井 「うわ、あいつ全然出ねえじゃん…」

斎木 「あら。彼女とデートでもしてるんですかね？」

白井 「はい…」

白井、電話を切る

白井、携帯をいじりながら少し間を置いて

白井 「あいつ、最近彼女と別れたんですよ」

斎木 「えーそれは可哀そうに。長くお付き合い合  
いされてたんですか？」

白井 「はい…」

白井、会話を聞いてない感じ

斎木 「白井さんはご結婚とかはされないんですか？」

白井 「色々ですね…ちよつと僕の先輩、呼んでみてもいいですか？」

斎木 「女性ですか？」

白井 「男性です」

斎木 「男かー。別にいいですけどね。先輩なら気も遣うだろうし」

白井 「はい…」

白井、電話をかける

斎木、手持無沙汰な感じ。手相をなぞる

白井 「あれー出ないな…この先輩仲良くて…」

斎木 「えーなんですか？」

白井 「はい…」

白井、電話を切る

白井、携帯をいじりながら少し間を置いて

白井 「この先輩、同郷なんですよ」

斎木 「白井さんはどちらのご出身なんですか？」

白井 「色々ですね…」

斎木 「色々？色々って地域があるんですか？」

白井 「はい…」

白井、携帯をいじっていてなんとなく会話を聞いてない感じ

白井 「色々ですね。この人、もつかいかけてみてもいいですか？」

齋木 「ぜひぜひ」

白井、携帯をいじり電話をかける

齋木、手持無沙汰な感じ。手相をなぞる

白井 「こいつ、マジで出ねーな」

齋木 「先輩ですよね？」

白井 「はは(笑)内緒ですよ」

白井、電話を切る

白井、携帯をいじりながら少し間を置いて

「ご出身は？」

「え？」

齋木 「あ、いや、ご出身」

白井 「三重ですね」

齋木 「三重県なんですね。三重の女性は どうですか？」

白井 「はい…」

白井、なんとなく会話を聞いてない感じ

齋木 「白井さんは神を信じますか？」

白井 「色々ですね。どうしようー齋木さん。誰も繋がらないですよ」

誰も繋がらないですよ

齋木 「全然、僕はふたりで大丈夫ですよ」

白井 「こうなったら部長に電話します」

齋木 「あの、本当に二人でいいですよ」

白井 「いやいや、ここまで待って頂いて齋木さんに悪いんで」

「いや、別に僕に悪くはないですよ」

白井 「いや、呼びます。部長と飲みたいわけじゃないんですけど、呼ばせて頂きます」

す

齋木 「あの…あれですか？僕と二人じゃ嫌ですか？」

白井 「…いやいや、そんなことはないですよ。仕事の話もできるし、良い機会だと思つて」

「そうですか。ちなみに女性ですか？」

齋木 「男です。おじさんです」

白井 「おじさんかー。やっぱ呼ばなくていいんじゃないですか？」

齋木 「いや、呼びます」

白井 「はい…」

白井、携帯をかける

齋木、手持無沙汰な感じ。手相をなぞる

白井 「それずっと何やってるんですか？」

齋木 「爪で恋愛線を伸ばしてるんですよ」

白井、聞いてない

齋木、カミながら感情線を伸ばす

白井 「ダメだ！出ない」

白井、電話を切る

白井 「まいったなー」

齋木 「あの…二人で大丈夫ですよ？」

白井 「今更、それは違うでしょうが」

齋木 「すいません」

白井 「どうしよ。あー、佐藤がいたな。中学の同級生…」

白井、電話をかける

「SE・「おかけになった電話番号は現在使われておりません」」

白井 「あれー佐藤、番号変わってるじゃん」

齋木 「二人にしましょう」

白井 「いえいえ。小学校の同級生…」

白井、電話をかける

「SE・「おかけになった電話番号は現在使われておりません」」

白井 「ダメだー」

齋木 「相席屋とか行きませんか？」

白井 「首を絞め合って別れた元カノに…」

齋木 「首を絞め合って別れた元カノですか？」

白井 「そうですね。流石にですよね」

齋木 「いやーでも、一応連絡してみたらどうですか？女だし」

白井、携帯をいじり電話をかける

「SE・トゥー・トゥー」

白井 「くそ！まあいいや。会っても、なに話せばいいか分かんないし」

齋木 「そんなに嫌ですか？僕と二人で飲む事が？」

白井 「…嫌ですわねー」

齋木 「なんで？」

白井C 「誰だって嫌じゃないですか？取引先の大して関係も無いような薄い人間と飲む事なんか」

齋木 「なんで？」

白石 「いや…誰だって嫌じゃないですか？取引先の大して関係も無いような薄い人間と飲む事なんか」

齋木 「僕は別にいいですけどね。」

白井 「嘘だ。興味ないでしょう？てか、女紹介して欲しい感じが強すぎて普通に引いてるんですよ」

齋木 「いや、そんなことは」

白井 「そんなことあるでしょ？僕の元カノでもいいくらいの感じでしたよね？めっちゃくちや気持ち悪いですよ」

齋木 「そんな取引先の相手によく言えますね」

白井 「もういいや。全部言いますけど、僕少ない時間であたのことめっちゃくちや嫌いです！本当に嫌い！」

齋木 「そんな言い方！」

白井 「帰りたい感じ全然察さないし、仕事に性欲持ち込むし、紙をめくる時涎めっちゃつけるし、もういいや！もう帰りますね！失礼しました！」

齋木 「いや、飲みましようよ！」

白井C 「こんだけ言ったのに？」

齋木 「一人で飲むよりはいい！…寂しいから」

白井 「じゃあ齋木さんも呼んでくださいよ」

齋木 「僕は別に二人でいいですよ」

白井 「気まずいだけでしょ！ここから二人で飲んだって」

齋木 「別に呼ぶような人もいないし、孤独なんですよ！二人でいいですよ！」

白井 「そうですか！わかりましたよ！こうなったら気が済むまで付き合ってくださいますよ！」

【L・暗転】

笑い合う二人

【L・明転】

---

泥酔している二人

白井 「本当、キモいよね」

齋木 「キモくねーし」

白井 「だから友達いねえんだよ」

齋木 「お前だって誰も捕まらなかっただろ」

笑い合う二人

二人 「親友！」

【L・暗転】

——